

研究

日本におけるアーカイブズのオンライン
総合目録構築にむけて

Toward construction of archival online union catalog in Japan

五島 敏芳

Haruyoshi GOTOH

本稿は、日本のアーカイブズ（文書館；歴史資料、永久保存記録、記録史料）のオンライン総合目録構築のための提案を論じる。日本におけるアーカイブズの検索手段（典型的には資料目録）やその電子化データは、その資料の収蔵者（文書館等資料保存利用機関）により、それぞれに作成され、形式を異にする。これまで日本では、共通のデータ形式の必要性は、およそ議論されてこなかった。いっぽう国際的にはアーカイブズの資料目録電子化（符号化）のための事実上の標準（共通のデータ形式）EAD, *Encoded Archival Description*（符号化永久保存記録記述）がある。いまEADは、いくつかの日本の機関で情報検索システムに採用されはじめた。ただし、まだ問題は残っている。EADデータは、市販応用ソフトウェアで容易に構築できない。また、EAD採用の検索システムは、しばしばデータ構築部分を含む業務用システムとして実現し、高価である。筆者は、旧国文学研究資料館史料館ないし国文学研究資料館において日本で最初にEAD適用の実践に取り組み、共同研究者とともにEADデータの表示・配信システムを開発してきた。さらに、これと融合的に機能する情報検索システム部分を開発した。この検索システムは、商用ソフトウェアの使用により高価ではあるが、複数機関の目録情報を横断的に検索する機能を持つ。また、国文学研究資料館「史料情報共有化データベース」が、情報の階層的編集機能の追加により一新された。これらを組み合わせて活用すれば、日本でもアーカイブズのオンライン総合目録を実現できるだろう。

The purpose of this paper is to propound an argument about the construction of the archival union catalog in Japan. First, I point out that archival finding aids in Japan and those data have their own original format. The necessity of common format was hardly discussed by their participants in Japanese archives. Secondly, I glance at the situation (or process) in Japan of application of EAD, *Encoded Archival Description* that is a de-facto standard for data of archival finding aids. The problems are that EAD data is too complex to be created by application software, and that EAD-based information retrieval systems that include business system for archives management are very expensive. Thirdly, I explain a solution of these problems. My colleague and I already have developed an EAD/XML data delivery/navigation system for Japanese archives. We also developed an EAD/XML data construction tool based on application software. Those systems are not expensive, but are a little difficult to use. Recently, we developed the information retrieval system that was able to retrieve EAD/XML data in two or more archives. And we succeeded in developing an online EAD/XML data construction tool. This tool can be easily used from web browsers. Lastly, I show a perspective of EAD/XML-based online union catalog in Japan. With the help of our systems and tools, we are convinced that the archival online union catalog will be realized in Japan.

*ごとうはるよし：国文学研究資料館アーカイブズ研究系

Haruyoshi GOTOH : National Institute of Japanese Literature, Department of Archival Studies.

1. はじめに

日本では、アーカイブズ（文書館；歴史資料、永久保存記録、記録史料）の検索手段（典型的または伝統的には資料目録）は、その資料を収蔵する各所の文書館、図書館、博物館、資料館等などの資料保存利用機関（収蔵者）により、それぞれに作成されてきた。日本での歴史資料保存の歴史的経緯から文書館以外の機関等に保存されることが多く、それら各機関等の専門の手法によって目録が作成されたためと推測できる。目録の情報を便利に活用するための電子化も、目録作成と同じく、それぞれの方法・内容でおこなわれたであろう。それらの目録データは、とうぜん共通の形式とはならない。形式だけではなく内容（こういった情報をつくるか）についても、いまだ日本のアーカイブズの世界に合意があるとはいえない。たとえば、ある機関では点数把握や財産登録のため（あるいは職員が仕事をした気になるため）物的1点ないし1件の単位のデータ採取に重点をおき、またある機関では物的に大量な資料群の状況を把握し整理や保存措置の計画のためにもかくも全体像や各部概要のデータをつくるかもしれない。しばしば前者の例では、全体像や概要のデータを持たず、またそういったデータの作成を嫌う。

共通のデータ形式の必要性は、もちろん関係者のあいだに認識されていなかったわけではない。しかし結果的には、無関心だったと言わざるをえない。たとえば「日本目録規則1987年版」への評価として形式的標準化を警戒する論調がうかがえ、歴史的にコンピュータ利用への慎重さ・危惧のほうが強調されてきた¹⁾。そのため技術的内容・過程にたいする理解をふまえて具体化する議論と行動には、結びつかなかった。アーカイブズの記述の国際標準 ISAD が登場したあと、日本でもその適用実験が多くおこなわれ、内容や考え方の標準化の議論は積極的に進められた。しかしそれらは、コンピュータにおける具体

化・実装というてんに限ればおよそ無意味だった。そういった具体化・実装のための技術的内容・過程への理解の浅さは、当時 ISAD にかんする議論をふまえて国文学研究資料館史料館が提案した「史料情報共有化システム」への無関心・拒絶として象徴的にあらわれた²⁾。かつて地方から史料館が資料をく収奪したのと同じように、こんどは労せずして資料の情報をく収奪するのか、と誤解された。いっぽうで文書館または文書館部門が持つべき情報システムの要件は、深く議論されることはなく、多忙な当事者がかざられた時間で決定する状況とあいまって、おそらく各収蔵者では独自の（しばしば図書館情報システムを拡張しただけの）情報システムを導入してしまい、技術的素地からも共通のデータ形式へ意識を向けづらくなったことだろう。

2. EAD の受容と展開（管見）

欧米とくに米国は、情報学または図書館情報学の先進地域の一つとみてよい。たとえば図書館の貴重書・手稿・書類等の部門で収蔵資料であるアーカイブズについてもその情報の管理に図書館情報システムを利用しなければならぬ前提があったとすれば、その図書館情報システムでアーカイブズの情報をあつかう際の不十分なところは改善しようとする動きがあっても不思議はない。おそらくそういった現場の実践から、共通のデータ形式 EAD, *Encoded Archival Description*（符号化永久保存記録記述）が開発された³⁾。EAD は、図書館の機械可読目録 MARC, *MAchine REadable Cataloging* に相当する。MARC でアーカイブズの情報をあつかおうとした際の問題——アーカイブズの記述が、長大であること、階層的構造にそくして階層的に配置できること、相互の関係性にそくして結びつけられること等などは、SGML/XML の利用によって解消された。既存の図書館情報システム（直接には MARC）との互換性も保たれ

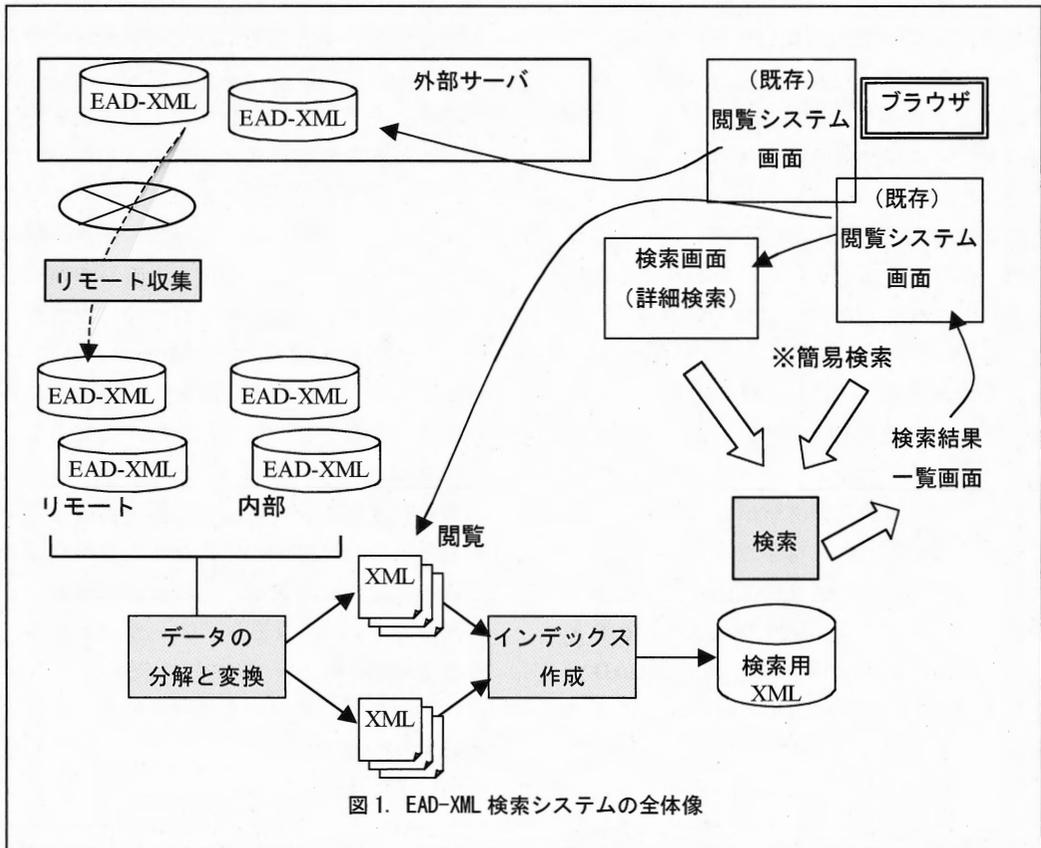
ていて、多くの機関が採用するに至った。さいきん日本でも EAD は、国立公文書館「デジタルアーカイブ・システム」、アジア歴史資料センター（第 2 期システム版）、国立国語研究所「資料情報検索システム」などに採用された⁴⁾。

EAD に対する日本での反応は、いくつかの紹介が存在することから、比較的早くあったのかもしれないが、適切な理解があったとはいえない。内容に立ち入った注目は、2000 年前後であろう⁵⁾。ごく一部の紹介をのぞけば、考え方の標準 ISAD と同列にあつかわれていたように見える。そのごく一部の紹介にうながされ、筆者や国文学研究資料館史料館の有志は、そのとき進行中だった「史料情報共有化システム」の研究に派生して、日本のアーカイブズの記述への EAD の適用と XML での実装を研究しはじめた。EAD がまだ XML へ正式に対応していなかったこともあり、国際規格 SGML をもちいない実践は、日本のアーカイブズ関係の識者の多くからは無視か反発を受けた。表示用 XSLT スタイルシートと EAD 記述を往き来しつつ検索手段データ全文の基本的表示に成功した 2002 年 5 月、史料館内へアーカイブズの記述ないし検索手段データの基本形として EAD 形式の採用を提案し、暫定的了解を得たうえで、史料館のホームページ上へ公表した。これが、おそらく日本国内最初の EAD 適用事例である⁶⁾。

国文学研究資料館での取り組みは、はじめ XML 形式の EAD データ (EAD/XML データ) を、すべて表示または部分的誘導的に表示するだけであったが、いまやキーワードによって検索結果を抽出できる情報検索システム (EAD-XML 検索システム) が追加された⁷⁾。検索システム部分は、検索キーワードにそくして断片化される検索結果にたいして、いかにアーカイブズのもつ階層的構造や脈絡を適切に表現できるかというんで、従来の検索システム——たとえば図書館の OPAC のそれ——とはまったく異なり、開発が困難だっ

た。費用も時間も要した開発だったが、筆者と旧史料館（のち国文学研究資料館）内外の共同研究者・支援者（多くは情報学の研究者であり、志のある業者数社もふくまれる）による海外調査や情報検索システムじたいの研究が完成をみちびいた。また、アーカイブズにかぎらず、図書・逐次刊行物、民族（俗）資料、美術作品等などの種々の資料の情報との情報の共有を可能にするための〈資源共有化〉の研究⁸⁾にも負うところがおおきい。アーカイブズのための検索システムの特質をきわだたせて認識することができたからである。

この EAD-XML 検索システムは、ひとつの資料収蔵者の資料目録（1 件～複数件）を対象にするだけでなく、異なった資料収蔵者の資料目録をも対象とし、横断的に検索することもできる⁹⁾。つまり、アーカイブズの目録を EAD/XML データにして公開しさえすれば、それだけでアーカイブズのオンライン総合目録の可能性がある、といえる。この横断的検索の機能を稼働させるには、まず公開 EAD/XML データの所在を把握し、その URL を所定の一覧表へ追加する。あとは、その URL をつねに EAD-XML 検索システムの検索対象と設定しておけば、当該 URL 下の EAD/XML データをふくむ索引を作成し横断的検索が可能になる。横断的検索は、かつての「史料情報共有化データベース」の手法——同じシステムをもつ複数の収蔵者とのあいだでリアルタイムに通信して検索結果のデータを集約する——とは異なり、横断的検索の機能を持つところがその検索サービスを提供することになる。アーカイブズの情報を集約する存在を許容しなければならないが、かつての「史料情報共有化システム」の構想とおなじく、横断的検索の機能は複数のところにあつてよく、さらに横断的検索機能の場は複数（特定）の拠点だけでなくより多くの場へひろがっていくことが望ましい¹⁰⁾。そうすれば、アーカイブズ情報は、特定の場へ集中するというよりもむしろ、相互に分有しあつて、保存され活用されることになろう。



このアーカイブズ情報の共有・交換が可能な状態こそが、〈アーカイブズネットワーク〉のオンライン空間上での実現であり、横断的検索機能をふくむ EAD-XML 検索システム（図1）はその核となるはずである。

以下、EAD-XML 検索システムの概略をながめておこう¹¹⁾。アーカイブズの電子的検索手段の構成を基本的表現・配信システムの部分と情報検索システムの部分とに分けるとすれば、それぞれにすくなくともつぎのような内容が考えられる。

(1) 基本的表現・配信システム

(1-1) 目録全体の全文表示

(1-2) 目録各部分の誘導的表示

(2) 情報検索システム

(2-1) 特定の資料群の検索

(2-2) 複数の資料群の検索

(2-3) 複数の収蔵者の資料群の検索

EAD-XML 検索システムの中心部分は、(2)

に該当するが、検索結果一覧以外の表示には、(1)の基本的表現・配信システムを利用し、両者は一体的に稼働する。検索結果一覧の表示画面からは、(1-2)の詳細情報を表示する画面へ遷移し、そこから(1-1)の画面へ切り替えることができる。他のページや、資料画像、資料（翻刻）本文、音声、動画映像、数値データ等などのデジタルオブジェクト（電子資料体）へは、別に画面がひらかれて遷移することになる。(1)にかんしては、すでに提示された内容とほぼかわらない¹²⁾ため、ここでは省略する。なお、(1-2)の画面において、1画面でいかに情報を収めるいっぽう、他の表示へ遷移できるようにするさい、HTMLのフレーム機能を使用しなかったてんには、留意しておく。フレーム機能は、ほんらい別々の画面を一体のものとして表現できるが、引用の範囲をこえて著作権侵害の危険性がある¹³⁾。複数収蔵者のアーカイブズ情

報の公開代行や、横断的検索の機能においては、EAD-XML 検索システムの範囲外のページへのリンクが発生する可能性があり、フレームページに不測の表示がおこらないともかぎらないためである。

アーカイブズの電子的検索手段の情報提示は、伝統的検索手段とおなじように、あくまで資料群や主題の一覧といった索引類から導かれるほうがよい。キーワードを入力して検索を実行する画面が、最初に利用者の目にふれるとすれば、その検索対象の資料目録のデータは、現在に生きる人間のおもいつく言葉と、資料に出現する(しばしば歴史的用語である)言葉とがよほど適切に対応し関係づけられていなければならない——検索語の辞書機能が充実している必要がある。くわえて資料目録のデータが、検索語となりうる豊富な言葉にみちていなければならない——簡略で情報量のすくない目録では、予測不能なキーワード検索にこたえられない。索引類のページと誘導的表示は、辞書機能や情報量の

不十分さを補い、不十分かもしれないキーワード検索の結果から利用者の失望をまねかないようにする効果がある。

このように(1)を前提とすれば、(2)の最初に(2-1)の焦点をしぼった検索があげられることはうなずけよう。(1-2)の画面のなかからキーワード検索を実行すると、その検索結果一覧は、(2-1)(2-2)共通の画面構成で表示される(図2)。この検索結果一覧の表示に、アーカイブズの情報検索システムとしての工夫を凝らした。結果表示の情報は、資料または記述の標題、番号、記述レベル、年月日、数量、形態に限り、標題を見出しとした。検索要求に合致した結果には、前述の情報一式の標題の左へ赤色矢印を付して示すものとし、当該データのどの部分に検索語が出現するかまでの提示は省いた。この赤色矢印を付したことが、アーカイブズの階層的構造や脈絡の表現と関係する。結果データの上位の階層に記述があるばあい、その階層の数だけ各階層の記述から標題だけを抜き出し、インデ

The screenshot shows a web browser window titled "EAD-XML検索システム Retrieval system: 検索結果一覧 Search results - Netscape". The page content includes a search bar with "AND" selected and "検索手段全体 Entire finding aid" entered. The search results are displayed in a list format with the following items:

検索結果	年月日	数量	形態
伊豆菲山江川家文書 +---54.54:類 -->【花言葉に関する小冊子?】 明治11年, (1878-01-31) 1, 堅冊(活版).	1967A/54./54-152	1	item
+---70.S:類 -->讀書目録(江川太郎左衛門の願書・上申書の目録). 安政1年, (1854-02-26) 1, 堅冊.	1967A/70./S1400	1	item
-->アメリカ船渡来に対する対応についての冊子. 嘉永7年3月22日, (1854-04-19) 1, 堅冊.	1967A/70./S2374	1	item
市川芳彦寄贈資料 +---(箱B310分資料). -->21世紀中部の轉図(概要版)(1991.05 中部経済連合会) 第1部 世界と日本 第2部 21世紀中部の変. 1991年5月, (1991-05) 1 冊子.	310-01	1	item
-->東濃西部研究学園都市轉呈(東濃西部研究学園都市推進連絡協議会). 1988年(1988) 1 冊子	310-02	1	item
-->サイエンス・シティフォーラム 通信第2号(1992.06). 1922年(1922) 1 冊子	310-03	1	item

図2. 検索結果一覧表示例

ントをもちいて階層的に表現した。当該データの上位の各階層の標題の表示により階層的な位置をあらわすことは、(1-2)の一覧表示・詳細表示でも実現していたが、この検索結果一覧の表示は、いわば(1-2)のある階層以下の一覧表示から検索要求にあう分だけ抜き出して表示したようなものだ。これがEAD/XML検索システムでの検索結果表示の標準となるから、利用者は求める資料の階層的な位置をつねに意識することになる。

なお、検索結果一覧は、標題、資料記号、記述レベル、年代(西暦)で、昇順または降順に並べ替えることができ、「指定無し」で並び替えれば、もとの順序(各記述データのID順)へもどすこともできる。

この後、a)結果を絞り込み新たな一覧を表示、b)特定の結果の詳細を表示し当該資料群に対する再度の簡易検索または各部分の表示、c)選択した特定資料群にかぎらない複数資料群に対する検索、の選択肢があり、c)をえらんだら(2-2)へ画面が遷移する。

(2-2)の検索画面は、(2-3)のそれ、または詳細検索の画面を兼ねている。検索項目は、全文のほか、標題、年代、年代範囲、記述レベル、出所・作成、内容記述、名前、役職等、関係地、主題、関連資料、収録の13である。それぞれの項目に、AND・OR・NOTのいずれかの条件を指定できる。(2-1)とのちがいは、検索結果一覧に資料群レベルまで上へさかのぼった標題まで表示され区切られることだ。ただし、いまのところ(2-3)の検索結果一覧であっても(2-2)と区別できず、収録者レベルの標題すなわち収録者名まで表示できていない。この点は今後なるべく早期に改善するつもりである。

いままたEAD/XML検索システムからは、EAD/XMLデータの構築が資料収録者・管理者はじめアーカイブズの利用者へおおきな利益をもたらすアーカイブズ利用の可能性をひろげる、ということを実感できると考える。

3. EAD/XML データ構築の問題

しかし、アーカイブズの資料(群)の複雑な階層的構造を表現できるほどEAD/XMLデータの内容は複雑である。そういった複雑な内容を持つデータの作成・構築には、まだ乗り越えなくてはならない障害物がある。

EAD/XMLデータ構築のうえで最大の問題は、その階層性とその伸縮自在性にある。階層性は、入れ子状のデータ構成が可能なSGML/XMLの採用により解決できるが、そういった階層的構造が、とうぜん資料によって異なり、階層の深度も異なる、という伸縮自在性は、たとえば市販応用ソフトウェアの単純な使用では解決できない。データベース管理システムや表計算ソフトウェアにおける行列単位の表は、行か列のいずれかに見出しを置き、そのもとにデータを配していく固定的・定型的構成であるが、EADの階層的データは、行や列がデータ(レコード)の内容次第で増えたり減ったりする。そのデータないしデータ群の範囲を判定し、適切な階層に配置するには、そのための特別な処理が必要になる。国文学研究資料館で開発された比較的安価な市販応用ソフトウェアを利用したEAD/XMLデータ作成支援工具(ツール)¹⁴⁾は、そういった処理を一定で自動化したもののだが、あくまで作成支援であり完全自動化されているわけではない(国文学研究資料館では、EAD理解の深化のため、データ作成過程の完全自動化はしない)。

また、最近の日本でのEAD採用事例は、しばしばデータ構築部分を含む業務用システムとして実現しており、高価である。

本稿では、EAD/XMLデータ構築に、国文学研究資料館「史料情報共有化データベース」の使用を提案したい¹⁵⁾。インターネットへの接続環境とInternet ExplorerやMozilla Firefoxなどのwebブラウザがありさえすれば、利用できるからだ。

国文学研究資料館では、2006年に第7期情報システム導入によるデータベース移行があ

り、一部のデータベースへの、代替機能による機能再現のため、結果的に機能追加のあるものが生じた。そういったデータベースのひとつに「史料情報共有化データベース」があり、同データベースの編集機能がおおきく拡張された。同データベースは、アーカイブズ記述データを対象とするが、これまで記述単位を資料群（出所または有意の一体的集合；fonds、collection など）のレベルに限っていた。資料群以下の資料小群（series、subseries など）や1点ないし1件（file、item など）のレベルのデータを入力できないこともなかったが、そういったデータがあっても、たとえば検索結果表示が資料群の一体性や階層的秩序を無視してすべて平板になってしまう——つまり、階層的にあつかうことは、できなかった。それが、可能になった。もちろん検索対象は資料群レベルのままだが、記述データの編集だけは下位レベルの記述を階層的に把握できる。資料群レベルにかぎらない階層的検索は、EAD-XML 検索システムで実現して

いる。EAD-XML 検索システムとのシームレスな連携のために、「史料情報共有化データベース」の新しい編集機能には、EAD/XML データへの出力機能が備わった。

以下、新しくなった「史料情報共有化データベース」編集機能を紹介していく。

4. オンラインツールによる解決

国文学研究資料館「史料情報共有化データベース」は、公表当時から趣旨に変わりはないが、一部すでに時代遅れとなったか意味に変化が生じた用語がみられる。誤解をまねく部分や、かつての主要な顧客であった歴史学研究者の一部の用語にかたよった表現など一般性に欠ける部分は、地味な画面デザインとともに、いずれ修正していくことになる（データベースの名称変更もありえる）。

まず同データベースのトップページから「史料情報編集メニュー画面へ」のリンクをえらぶ。そのためには、あらかじめ「編集ユー

カテゴリアイテム一覧

カテゴリ: 奈良県立図書館

グループ名 : 史料情報共有化システム

データベース名 : 史料情報共有化システム

データベースメニュー ヘルプ

TOP > 奈良県立図書館 | カテゴリ一覧 |

新規アイテムの追加

全ての項目 検索 このカテゴリのみ (サブカテゴリ除く)

全てのカテゴリを表示 全てのメタデータ状態 全ての編集状態 表示件数: 20件 次へ

カテゴリアイテムを表示しています。 21件 [1 ~ 20件目]

アイコン	タイトル	サイズ	更新日	公開	操作	資料ID	管理ID	編集	複製	EAD
📁	大和国高市郡金橋村文書	12アイテム	2007/12/26 16:10:49	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554321537		編集	複製	EAD
📁	大和国宇陀郡麻生田村文書	0アイテム	2007/12/24 19:20:04	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554521540		編集	複製	EAD
📁	源役所文書	0アイテム	2007/12/24 19:19:28	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554121533		編集	複製	EAD
📁	奈良県庁文書	2アイテム	2007/12/24 19:19:03	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613553921531		編集	複製	EAD
📁	大和国式下郡法興寺村文書	13アイテム	2007/12/24 19:18:26	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554121534		編集	複製	EAD
📁	大和国宇陀郡額戸村薄木家文書	0アイテム	2007/12/24 19:17:37	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613553821530		編集	複製	EAD
📁	大和国式下郡辻村文書	0アイテム	2007/12/24 19:16:53	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554821543		編集	複製	EAD
📁	大和国忍海郡忍海村文書	0アイテム	2007/12/24 19:16:09	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554621541		編集	複製	EAD
📁	大和国葛上郡三倉堂村髭根家文書	0アイテム	2007/12/24 19:15:24	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613554721542		編集	複製	EAD
📁	大和国葛上郡名柄村中野家文書	0アイテム	2007/12/24 19:14:43	公開	<- ミセッテイ ->	F2006012613555121548		編集	複製	EAD

図3. 「史料情報共有化データベース」編集機能における資料群一覧

ザ」としての登録を済ませておかななくてはならない¹⁶⁾。編集ユーザの資格は、アーカイブズ（アーカイブズの資料をもふくむ）の収蔵者（またはその代理人）で、基本的に収蔵資料を公開していて、インターネット上でも収蔵資料の情報を公開してもよいと考える者である。はじめ機関を想定していたが、収蔵資料を公開できるか閲覧希望者に何らかのかたちで対応できるなら、個人のばあいであってもよい。そういった条件は、資料収蔵者の情

報として明記されている必要がある。

編集ユーザとしての登録が済んでいて、すでに当館の調査によって資料情報が登録されていれば、自分のところの収蔵資料の一覧が示されるはずである（未入力状態のばあい一覧表の列見出しのみ表示される）。冒頭の「カテゴリ」として、登録されている図書館等の資料収蔵者名が表示され、検索や表示のための web フォームやコンボボックスの下に、「カテゴリアイテムを表示しています」として、収蔵資料の一覧が表の形式であられる（図3）。収蔵資料の一覧表の列（表示項目）は、つぎのとおり：種別、タイトル、サイズ、更新日、編集状態（公開・非公開の別）、資料群記号（資料記号）、管理番号、機能（編集・複写・EAD；最後の「EAD」のリンクアンカがEAD/XML出力の機能）。収蔵資料の一覧にたいしては、当該一覧表上部にあるフォームやコンボボックスを使った「リアルタイム検索」等により、目的の対象へ絞りこむことができる。

ここで資料収蔵者名の左脇にある「カテゴリ情報」のリンクをえらべば、資料収蔵者じたいの情報を編集できる。資料収蔵者じたいの情報は、表1のとおりで、登録情報と収蔵者所在情報は、基本的に必須となる。

収蔵資料の一覧から、いずれか1つをえらべば、その資料群の内部の記述データの一覧が表示される。シリーズの概要記述があるならそのシリーズの数だけシリーズの標題が、またはシリーズを設けていなくてアイテムの記述データが列挙されるならばアイテムの標題が、さきの収蔵資料の一覧と同じような表形式であられる。シリーズの下にサブシリーズを設けていれば、同じようにサブシリーズの一覧表があらわれる。はじめに資料収蔵者が表示されていた、検索や表示のための web フォームやコンボボックスの上の情報表示部分には、いまどのレベル（記述レベル）のデータを編集しているか、その当該記述データの標題にいたるまでの各上位の標題が階層的な位置（深度）として表示される。そ

表 1. 「史料情報共有化データベース」編集機能の収蔵者情報

(領域)・入力項目	備考
<i>(登録情報)</i>	
公開・非公開	選択式, 必須
収蔵者記号	必須
収蔵者名	必須
収蔵者名ヨミ	必須
収蔵者名英文	必須
収蔵者内部組織名	
収蔵者内部組織名英文	必須
<i>(収蔵者所在)</i>	
都道府県	選択式, 必須
郡市町村名	推奨
地名等	推奨
電話番号	推奨
ファクシミリ番号	推奨
連絡先メールアドレス	
ホームページ	
<i>(利用案内情報)</i>	
交通	
開館日時	
利用資格・手続き	
設置年・経緯	
関係参考情報	
収蔵資料概要	
収蔵資料検索手段	
未公開資料存否	
担当連絡先	推奨
<i>(記述更新日)</i>	
更新日付	編集時自動更新

注) ゴチック体は入力項目。※初期値は公開。

表 2. 「史料情報共有化データベース」編集機能の資料情報

記述レベル 領域・入力項目	資料群 備考	小群以下 入力項目	subfonds	file/item
<i>登録情報</i>				
登録先(必須)	自動, 変更可	○	省略不可	省略不可
公開・非公開※1	選択式	○※1	省略不可	省略不可
記述レベル※2	選択式	○※3	省略不可	省略不可
識別記号(必須)	管理情報	○	省略不可	省略不可
資料記号(必須)	表示情報	○	省略不可	省略不可
標題(必須)	「 」で区切り英文入力可	○	省略不可	省略不可
検索手段				
-標題(英文とも)	入力推奨			
-発行年代				
-発行年代コード				
-符号化年代				
-符号化年代コード				
-改変事項内容				
-前付け(記述凡例等)				
<i>概要情報</i>				
年代	(西暦か注記は必須)	○		(いずれか)
-上限(西暦)	基本的に4桁	-○	推奨	推奨
-下限(西暦)	基本的に4桁	-○	推奨	推奨
-主年代		-○		
-年代注記	表示または採取記述情報	-○	必須	必須
出所・作成	必須	○	推奨	推奨
規模		○		
-書架延長(m)	必須	-○		
-数量(点)		-○		必須
-物的状態注記		-○	推奨	推奨
要約	必須			
使用言語	必須	○		
<i>利用者のための情報</i>				
利用条件	必須	○		推奨
使用条件	必須	○		
望ましい引用形式				
利用可能な代替形式				
注記		○		
関連資料		○		
原本の所在	マイクロ資料等複製資料			
他の検索手段				
出版物		○		
物的特徴および技術要件		○		推奨

(表 2 つづき)

記述レベル 領域・入力項目	資料群 備考	小群以下 入力項目	subfonds	file/item
索引事項 標目 -人名 -家名 -団体名 -役職等 -地名 -主題 -名称	いずれもつぎの記法を適用 「 」で区切り複数入力可	○ -○ -○ -○ -○ -○ -○ -○		いずれか授受関係の 人・団体等の名称と して掲出を推奨.
管理的情報 入手源 伝来 追加受入情報 評価選別等スケジュール 整理方法 資料操作情報 配架 入力者 記述担当者	入力推奨 入力必須 入力必須	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	推奨	必須 必須 必須 必須.
出所の履歴/経営の歴史 履歴 略年表等 -略年表等見出し -略年表等本文	「 」と改行で区切る	○		
範囲と内容 範囲と内容		○		内容摘記, 引用も可
(記述更新日) 更新日		○		

注) ゴシック体が実際に入力項目. 下線は, 自動更新項目. 実際に入力項目を包括するだけの項目は, 明朝体で示した. 小群の入力項目は, その有無を○で省略して示した. 記述レベルごとに入力の必要の度合い等を記した. ※1: 選択肢は, 「公開」か「非公開」のいずれか. ※2: 選択肢は, 「fonds」「collection」「recordgrp」のいずれか. ※3: 選択肢は, 「subfonds」「subgrp」「series」「subseries」「class」「file」「item」のいずれか.

の左脇の「カテゴリ情報」のリンクをえらべば、当該の記述データを編集できるし、表形式の一覧のなかのいずれかの記述データの機能の列の編集のリンクをえらべば、当該記述データの直下にある、選択した記述データの内容を編集できる。

資料群以下の記述データの情報項目は、基本的に「史料情報共有化データベース」公開

当時と変わっていない。アーカイブズ記述国際標準 ISAD(G) 第 2 版に準じた記述要素に一部の情報項目を加えた内容である。ただし編集画面としてあらわれる web フォームは、DACS の記述順に入力項目を配した。ISAD がマルチレベル記述を可能にしていることにならない、どの記述レベルでも基本的に同じ編集画面となるが、資料群と小群以下とで表示

する項目を変えた。

小群以下のフォームは、資料群のそれよりも項目数が少ない。それでも項目が多いようにみえるが、小群以下の記述レベルでは、すべての項目にデータを入力する必要はない。特別にくわしく情報を示さなくてはならないばあいを除き、下位の記述レベルに向かうにしたがい情報量は基本的に減っていくはずだ。資料群・小群の情報項目は、表2のとおりである。

ある階層以下のデータを一括で別の位置へ移動することもできる。親組織からの新たな情報の提供があったり資料の詳細の分析が進んだりして、以前の編成を修正したいこともあるだろう。そのばあい、編集対象としているデータの登録先を変更することで、階層的な位置を変更することができる。

こうして編成の作業を終えれば、あとは編集が完了したデータを公開に設定する。特定の部分を非公開に設定することもできる。こうして、まず「史料情報共有化データベース」において資料群の情報を公開できる。つづいてEAD/XMLデータとして、テキストファイルをダウンロードすることもできる。とくにダウンロードしなくても、そのまましておけば国文学研究資料館におけるEAD/XML検索システムの横断的検索機能の検索対象として自動的に登録される。非公開に設定した部分のデータは、EAD/XMLデータとして出力もされないし検索対象となることもない。

EAD/XMLデータをダウンロードするばあい、いくつかの用途が考えられる。自分のサイトで公開するため、または「史料情報共有化データベース」のEAD/XMLデータ出力機能では対応していないEADの記述を追加するため、といったことがあげられる。

後者のばあいは、出所の年表をさらに追加したいとか、索引事項をふやしたい、他の情報資源へのリンクを設定したい等などの調整かもしれない。前者は、みずからwebサーバないしデータベースサーバを持っているば

あいであろう。ただ、データは、複数の場所で保存するほうが安全である。前述のような用途にかぎらず、EAD/XMLデータへの理解のためにも、まず手元にダウンロードすることを試していただきたい。

みずからEAD/XMLデータを保持してサーバで公開するほうが、そのための知識・手間・費用・時間を要しても、表現上も編集上も自由度が高い。国文学研究資料館では、少なくともEAD/XMLデータの配信機能の部分（応用ソフトウェアを使用していない部分）については、無料で配付する予定である（あくまで研究成果としての配付であるため、みずからのサーバの設定にあわせたカスタマイズは自己責任となる；職員の出張費用を負担していただける前提で要請があれば可能なかぎり対応する用意がある）。

「史料情報共有化データベース」では、編集画面がwebフォームであり、記述単位ひとつずつしか編集できない。すでに1点ないし1件のレベルの記述データが表計算のデータとして大量に存在するから一度に流し込むことはできないか、といった問い合せもあるだろう¹⁷⁾。そのばあい、既存のデータの内容によっては、直接にEAD/XMLデータへ変換したほうがよいこともある。資料群レベルの概要記述のデータもそろっているばあい、国文学研究資料館で公開しているEAD/XMLテンプレートを利用して、みずからEAD/XMLデータを構築してもよいし、すでに提示された市販応用ソフトウェアを用いる方法もある。概要のデータだけを「史料情報共有化データベース」の編集機能によってEAD/XMLデータとして出力してもよい。資料群レベルの概要記述が、まだつくられていないのであれば、ぜひ「史料情報共有化データベース」編集機能の活用をすすめたい。そうして資料群レベルだけのEAD/XMLデータができあがれば、適切な位置にEAD/XMLのタグを付与した既存の1点ないし1件レベルのデータの一式を挿入する。具体的には概要レベルだけのEAD/XMLデー

タのテキストファイルの適切な位置へ、1点ないし1件レベルのデータを貼り付けることになる。1点ないし1件レベルのデータが階層性を持っていれば、一度の作業では済まないかもしれない。表計算等の応用ソフトウェアのほうで階層を反映したタグ付けをできるように調整する必要がある。あるいは1点ないし1件レベル以外の中間的階層の記述についても、やはり「史料情報共有化データベース」編集機能を使うのが結果的に効率のよい解決法となるかもしれない。

5. おわりに

国文学研究資料館の新「史料情報共有化データベース」編集機能を活用することでEAD/XMLデータをつくり、それらEAD/XMLデータを対象とするEAD/XML検索システムによって横断的検索を実現する——これが、本稿の提案する〈日本におけるアーカイブズのオンライン総合目録構築〉である。

もちろんEAD/XMLデータをつくる部分やそれを公開する部分には、いくつもの選択肢がある。横断的検索も、海外の既存EAD検索システム——たとえばEADデータ形式の模範としたカリフォルニア電子アーカイブOAC, *Online Archive of California*¹⁸⁾——へ参加する、という選択肢もありえよう（このばあい、「日本における」という喫緊の課題の解決は希薄になってしまうが）。そういった、いくつもの選択肢はありながら、必ず了解しておくべきことがある。

- (A) EAD/XMLで目録データを構築しEAD/XMLファイルを公開する。
- (B) EAD/XMLデータへ独自の拡張を施さない。
- (C) EAD/XMLデータとして必須の記述＝資料群レベルの記述を必ずつくる。

これらが守られさえすれば、配信や検索のシステムが何らかの理由で使えなくなったとしても、データだけは生き残る。データ内容を適切に翻訳すれば、くアーカイブズ管理の

関係者にとってEADタグは共通語だから、日本以外でもデータを読解し処理することができる¹⁹⁾。しかし、EAD/XMLデータ以外のデータ形式では、アーカイブズの情報共有には適さない。データ構造・ファイル形式とも、である。

商用の応用ソフトウェアが、いかに普及して使いやすかろうとも、いつその製造元がデータ形式（ファイル形式）の仕様を変更するかわからないし、すでに新しい版のソフトウェアの購入をうながすための上位互換の制約が存在する。たとえば特定の時期に発売されたMicrosoft Excelのファイルは、いつまでも最新版Excelで読み取れるとはかぎらない。かといって、アーカイブズの脈絡が明示されないどころか、どのレコードがどの資料群に属するのか不明となってしまうような、カンマ区切りのテキストファイル形式では、当事者以外の情報共有を前提としたとき適切とはいえない。Excelファイルやフラット-テキストファイルは、わかりやすく便利そうに見えても、アーカイブズ管理の長期的観点からは害悪の要因になりこそすれ利益は皆無である。〈EADやXMLはよくわからないから〉といって最低限の理解を拒絶し、安易にExcelファイルやフラット-テキストファイルを使用することは、アーキビストとしての専門性の放棄であろう²⁰⁾。アーカイブズの実物とともに、アーカイブズ管理の工具である検索手段の電子的データも、永続的に保存される必要がある。その永続的保存の要件を、EAD/XMLデータは満たしている。

EADのタグだけでは情報の記述に不足するからといって、勝手にタグを追加してしまうと、〈共通語〉ではなくなってしまう。タグでなくとも何らかの情報をEAD/XMLデータのファイルに加えなくてはならないとすれば、XMLの仕様にもとづいてタグに影響しない符号（たとえば「<?」「>」等）を用いて、ファイル内の特定の場所に情報を加えるよりほかに手段がない。

資料群の概要レベルの記述データの必要性

も、強調しておく。面倒に考えたり、資料を出所等の一体性にもとづいて受け入れてないことを理由に、しばしば概要レベルの記述データ作成をいとうひとがいる。しかし、概要レベルの記述データは、資料の存在を説明する証拠・根拠となる。どういった経緯で入手したか、出所はどういった存在か、あるいは収集資料であれば、どのような方針で収集されたか、どういった収集者(たち)を経ていまにいたるのか、等などの情報は、資料1点ないし1件ごとに、記述しなければならないこともあるかもしれないが、ふつう資料群としてまとめて把握しておくものだ。EAD/XML データは、一般利用者——アーカイブズのもととなる記録に直接かかわっていない当事者以外——を讀者として想定しているし、そういった読者のアーカイブズ理解の基本的道程は、前述の概要から必要な細部へとという方向性を持っている。

日本においてアーカイブズのオンライン総合目録を実現しようとするならば、それぞれがEAD/XML データをつくって公開しさえすればよい。そのEAD/XML データをつくるには、何のツールも使わなければEADとXMLの知識が必要となるし、応用ソフトウェアの支援ツールを使っても一定の知識が求められる。比較的かんたんに使うことのできるツールとして、新「史料情報共有化データベース」の編集機能がある。

EAD/XML データをもとにした横断的検索は、かつての「史料情報共有化システム」の構想のように情報〈収奪〉的過程をとまうかもしれないが、それはあくまでアーカイブズの情報を共有・交換するための過程のひとつである。いまだに情報〈収奪〉云々の意識をもっている向きは、こんどは「史料情報共有化データベース」から利益を〈搾取〉すればよい。EAD/XML データ構築のツールとして使えるだけ使いきって、それぞれが(分散的に)EAD/XML データを維持し公開できるようになれば、資料群レベルにかぎらない「史料情報共有」が実現する。そのころに

は、ヨリ容易なEAD/XML データ構築のツールが完成しているかもしれない。そのときこそ「史料情報共有化データベース」やその前身的存在「史料所在データベース」を、完全に過去の遺物として廃棄できるだろう。

さきに原理原則の議論をするより、ともかくEAD/XML データを実際につくり、そのうえで情報共有・交換の議論をしよう——このことをアーカイブズ管理の実践者へ呼びかけ、本稿のむすびとする²¹⁾。

参考文献

(凡例)

参考文献は、編著者名の50音順で配列し、同一編著者に複数の作品があれば、公表時期順とした。注では、「五島2003」のように、編著者名(姓)と公表年により略記した。なお、同じ年に同一編著者の作品があれば、「五島2003a」のように公表時期順に西暦の後にアルファベットを付した。

編著者名や標題等の字数が多いばあい、記載の煩雑を避けるため()内に示した略記を、本文や注で用いた。

(文献一覧)

- 青山英幸.『記録から記録史料へ』. 東京: 岩田書院, 2002.
- 安藤正人.「Encoded Archival Description (EAD): 記録史料目録情報の電子化: PROの試み」.『記録史料の情報資源化と史料管理学の体系化に関する研究: 研究レポート』, No.2. 東京: 国文学研究資料館史料館, 1998-03, pp.112-116.
- 安藤正人.『記録史料学と現代』. 東京: 吉川弘文館, 1998.
- 大友一雄.『平成一五年度~平成一七年度科学研究費補助金基盤研究B「アーカイブズ情報の集約と公開に関する研究」(研究代表者: 大友一雄・課題番号: 15300083)研究成果報告書』. 東京: 国文学研究資料館, 2006.

- 岡村久道, 近藤剛史. 『インターネットの法律実務 新版』. 名古屋: 新日本法規出版株式会社, 2001.
- 五島敏芳. 「日本の記録史料記述 EAD/XML 化と記録史料管理: 記録史料管理過程における EAD 利用の位置をめぐって」. 『情報知識学会誌』. 第12巻4号, 2003-01, pp.3-21.
- 五島敏芳. 「アーカイブズ情報の電子化とネットワーク: 電子的検索手段の国際規格」. 『アーカイブズの科学』. 国文学研究資料館史料館編. 東京: 柏書房, 2003, pp.261-277.
- 五島敏芳. 「日本のアーカイブズ管理における EAD・EAC: XML による実践の可能性」. 『情報知識学会誌』. 第14巻3号, 2004-07, pp.35-43.
- 五島敏芳, 丸島和洋, 戸森麻衣子, 村越一哲, 岩熊史朗. 「アーカイブズの電子的検索手段の構築・表現」. 『記録と史料』. No.15, 2005, pp.25-40.
- 後藤真. 「京都府行政資料のデジタル・アーカイブ化とその課題: EAD/XML の適用の可能性と歴史学」. 『都市文化研究』. Vol.8. 大阪: 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター, 2006-09, pp.2-15.
- 鈴江英一. 『平成一一年度～平成一三年度科学研究費補助金基盤研究 B (2) 「歴史史料情報の共同集約と共有化に向けてのシステム構築に関する研究」 (研究代表者: 鈴江英一・課題番号: 11410096) 研究成果報告書』. 東京: 国文学研究資料館史料館, 2002.
- 独立行政法人国立公文書館 (NAJ). 「特集国立公文書館デジタルアーカイブ」. 『アーカイブズ』. Vol.21, 2005-09, pp.1-38.
- (NAJ). 「特集デジタル・アーカイブによる歴史事実の共有: アジア歴史資料センター5年の回顧と展望」. 『アーカイブズ』. Vol.27, 2007-03.
- 保坂裕興. 「電子目録と国際標準の思想」. 『歴史評論』. No.594, 1999-10, pp.30-44.
- 森本祥子. 「EAD を用いた資料記述システムの開発」. 『アーカイブズ学研究』. No.4, 2006-03, pp.92-102.
- 安澤秀一. 「電子記録管理・メタデータ記述・マークアップ技法」. 『駿河台大学文化情報学研究所所報』. 第1号, 2000-07, pp.3-17.
- 安澤秀一. 「エンコーデッド アーカイヴァルデスクリプション EAD: SGML/XML の応用形として」. 『研究報告人文科学とコンピュータ』. 51-3, 情報処理学会, 2001-07, pp.17-24.
- Steven L. Hensen, ed. *Archives Personal Papers and Manuscripts: A Cataloging Manual for Archival Repositories, Historical Societies and Manuscript Libraries*. 2nd ed. (APPM2). Chicago: Society of American Archivists. 1989, 196p. (ISBN 0-931828-73-2) ※初版は、1983年に Library of Congress (米国議会図書館) より発行。
- Describing Archives: A Content Standard (DACS)*. Chicago: Society of American Archivists. 2004, 269p. (ISBN 1-931666-08-3)

[注]

- 1) 資料目録の標準化・自動化は、資料群の構造的認識をふまえた階層的構造の提示された検索目録 (基本目録) の研究じたいが進展していない段階では時期尚早だ、という指摘である (安藤1998第4章など)。そういった指摘が、先行する図書館情報学の情報検索理論や、コンピュータでの実装に必要な技術的知識を避ける (免罪符) を与えてしまったのではないか。
- 2) 「史料情報共有化システム」やそれを具体化する「史料情報共有化データベース」については、鈴江2002を参照のこと。その後、大友2006の研究により「史料情報共有化データベース」の収録件数が大幅に増加したが、基本的に研究グループ側からののはたらきかけに応えるかたちで収録を容認し

たばあいが多い。

- 3) EADの公式情報は、米国議会図書館の <<http://www.loc.gov/ead/>>を参照のこと。同URLからたどることのできるSAA米国アーキビスト協会のEAD支援ページ<<http://www.archivists.org/saagroups/ead/>>をも参照されたい。以下、本稿で参照するURLは、いずれも2008年1月末時の参照である。なお、EAD・EACの基本的事項の一部は、五島2003bに解説がある。
- 4) NAJ2005、森本2006、NAJ2007など。
- 5) 安藤1998aは、1997年の口頭報告の資料であるため当日の内容をうかがえないが、資料からはEAD開発の履歴にふれるのみである。保坂1999は、EAD開発の経緯や基本思想等にふれるだけでなく、web上に実装された閲覧・検索のシステムの画面の構成・遷移を、みずからの検索体験とその過程から解説する。安澤2000は、電子記録管理に対応したメタデータとしての可能性のなかでEADにふれ、安澤2001はEAD導入の利益・効果やEAD要素対訳・基本要素一式・関係文献一覧を紹介した。青山2002第7章は、もと東京大学史料編纂所中核的研究拠点形成プログラム「前近代日本の史料遺産プロジェクト」第2回公開研究会（2000年10月7日、東京）の口頭報告では、ごく簡略にEADを説明したが、同報告の2ヶ月後の講演「国際標準とEAD」（アーカイブズ・インフォメーション研究会主催「オープンセミナー・インきょうと'2000」口頭報告、2000年12月3日、京都）は、EAD Application Guidelines（EAD応用指針）第1版の付録A推奨される最低限の検索手段要素、同B交差対応表（Crosswalks）、同Cよくたずねられる質問（FAQ）、同E実例（部分）の翻訳を紹介し、実例から想定できる表現例を示した。

これらの研究のうち、保坂1999ではISADの理念がEADによる目録へ反映されていると理解する。これは、EADと

ISADとの混同ではないかもしれないが、EADをめぐる米国の状況を正確にあらわしたとはいえない。筆者の参加した2004年以後の訪米調査によれば、EADを必要とするような現場において、日常に意識するのはISADよりも目録規則類であった。米国のアーカイブズの目録規則類としては、英米目録規則（AACR）と、DACS（永久保存記録を記述する：内容標準）をあげることができ、DACS以前にはAACRと（DACSの位置の説明によれば）APPM（永久保存記録・個人書類・手稿：永久保存記録収蔵機関・歴史協会・手稿図書館のための目録手引き）が使用されていた。

- 6) EAD適用の過程は、五島2003aを、EAD適用にいたる道の詳細は、五島2004を、それぞれ参照のこと。その後のEAD適用の成果として、NAJ2005、森本2006、後藤2006をあげる。
- 7) この検索機能は、科学研究費補助金・若手研究（A）「アーカイブズのデファクト国際規格EADによる検索システムに関する基礎的研究」（研究代表者：五島敏芳・課題番号：17680022、平成17年度～平成18年度[2005/2007]）の研究成果の一部である。本稿もまた、同研究成果の一部である。
- 8) 国文学研究資料館（複合領域研究系）共同研究「文化情報資源の共有化システムに関する研究」プロジェクト（研究代表者：安永尚志、平成16年度～平成18年度[2004/2007]）。研究プロジェクト名を冠した研究成果報告がある（平成17年度、平成18年度）。
- 9) 横断的検索の機能は、科学研究費補助金・基盤研究（A）「歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究」（研究代表者：高埜利彦・課題番号：15202015、平成15年度～平成18年度[2003/2007]）の研究成果の一部である。
- 10) 鈴江2002の「II-1-(4)システムに関する実験と結果」（執筆分担：五島）、また同所

収の公開研究会 (2002年1月10日、東京) 記録の五島口頭報告原稿『「史料情報共有化データベース」における横断的検索実験』を参照のこと。

- 11) 本稿にとりあげる EAD-XML 検索システムは、いくつかのサイトで公開されるかもしれないが、ここでは後述「史料情報共有化データベース」と連動している国文学研究資料館のサイト <<http://base1.nijl.ac.jp/~eadfa/>> をあげておく。ただし、本文に述べる電子的検索手段の要件となる索引類のページはまだ整備中である。
- 12) 五島ほか2005の丸島和洋執筆担当部分。当時の表示画面とは、(1-2)の表示画面の左側にある目次 (ナビゲーションパネル) へ検索フォームとボタンが追加されたところが異なっている。
- 13) このことは、岡村ほか2001に言及がある。
- 14) 五島ほか2005を参照のこと。
- 15) 国文学研究資料館「史料情報共有化データベース」は、同館ホームページの電子資料館からたどりつけるが、直接の URL も記しておく。<<http://base1.nijl.ac.jp/~isad/>>
- 16) 「編集ユーザ」登録の申込みは、種々の事情で受付を停止しているように表示されているが、館のホームページの問い合わせ窓口から、「史料情報共有化データベース」編集ユーザ登録の要望を記して送信していただきたい。
- 17) 一括登録がまったく不可能なわけではないが、現時点では国文学研究資料館のサーバにたいして各編集ユーザがリモートで操作できる環境にない。国文学研究資料館側で代行的に一括登録するばあい、一括登録に必要なデータ形式にととのえられている必要がある。そのデータ形式へとのえらるる負担を編集ユーザと館のいずれにも負わせられないため、基本的に一括登録の依頼にこたえることは、いまはしていない。本稿執筆時点では、正確・厳密なデータ公開でなくてもよいことへの理解があるばあいのみ、実験的に一括登録を実施している。

18) OAC については、つぎの URL を参照のこと。<<http://www.oac.cdlib.org/>>

19) タグを〈共通語〉とする感覚は、アーカイブズの関係者のあいだで国際的に共有しているものらしい。筆者が2004年に研究図書館連合 RLG (当時) を調査した際、筆者が日本での EAD 適用・実装の実例をプロジェクターに表示しながら英語でうまく説明できないでいたところ、同所の Anne Van Camp 氏がタグは共通語だから通じていると述べてくれた。

なお、アーカイブズ情報の翻訳については、たとえば筆者がそれを実行しようとするならば、残念ながら現実的には英訳しかできない (じっさいには、もっぱら筆者の管理下にある国文学研究資料館の収蔵アーカイブズ情報データベースは、その標題や概要の英訳すらおぼつかないほどである)。国際的情報共有・交換は、筆者のような決定的に語学力不足の者にとって、まだ努力目標である。

20) 日本の現状は、アーキビストを必要としないことが民意となっていて、その根拠のひとつに種々の技術による代替が考えられる。EAD/XML データの処理も、情報処理等の他分野の者が技術的に対応して済む内容を持っている。ただ、EAD/XML のようなアーカイブズ管理にかかわるメタデータへの理解がアーキビストの専門性を構成しているとすれば、私見では、日本のアーカイブズ管理の関係者の多くは、きわめて不勉強であるし、アーキビストとして自称するにはふさわしくない。蛇足だが、アーカイブズ認識の側面は、アーキビストの必須知識ではなく、むしろ阻害要因になりうることを付け加えておく。

21) 注11)に示した EAD-XML 検索システムには、「archivesTies」という語がみえる。EAD/XML データをとおして、ネットワーク上の電子的検索手段を結ぶだけでなく、アーカイブズどうしの絆をふかめられるように、という願いや期待をこめた、筆

者が提唱しようとしている運動である(命
名に、80年代のアメリカのテレビドラマ
のタイトルの影響を否定しない)。その意
図に賛同していただけるならば、ぜひ
EAD/XML データによる資料目録の公開に
ご参加いただきたく、お願い申し上げる
次第である。

〔付記〕

本稿は、注9)の科学研究費補助金(科研)
の研究による公開研究会「歴史情報資源と
アーカイブズ・ネットワーク」(共催:日本
アーカイブズ学会、2006年12月9日~10日、
東京)での口頭報告予稿および同科研成果報
告書担当部分原稿をもとにしている。公表の
機会がなく時日が過ぎていたため、一部を改
稿して本誌へ投稿した次第であるが、掲載の
審査・採択に感謝したい。本稿をふくむ筆者

のEAD関連の研究には、つぎの諸先生にお
世話になった:前記科研の研究代表者・高埜
利彦先生、EAD-XML検索システム開発に
さいし懇切丁寧なご指導をいただいた国文学
研究資料館名誉教授・安永尚志先生と京都大
学地域研究統合情報センター教授・原正一郎
先生、アーカイブズ管理におけるEAD・
DACS等の基本知識のご指導をいただいた国
文学研究資料館名誉教授・安澤秀一先生、文
書館だけでなく博物館・図書館の資料情報の
取り扱いについて考える機会をいただいた静
岡大学情報学部教授・八重樫純樹先生。ここ
に記して感謝申し上げます。本稿にとりあげた
EAD-XML検索システムは、実に10年以上前
の基礎的研究が直接の種子となっている。こ
れまでに多くの関係者にご協力・ご教示いた
だいている。一人ひとりのお名前をあげるこ
とはしないが、諸兄姉に謝意を表す。ありが
とうございました。